

鶴山書院報

第6号

公益財団法人
孔子の里

〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原庫舎内
TEL 0952-75-6112
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com

発行人
理事長 横尾 俊彦

大雨に負けず未来を拓く



公益財団法人孔子の里
理事長 (多久市長) 横尾 俊彦

八月二十八日、大変な大雨災害でした。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。これほどの雨はかつてありません。家屋浸水、裏山土砂崩落等での難儀など、重ねてお見舞い申し上げる次第です。

多久聖廟は特別大雨警報の豪雨に耐え、私たちに力を与えてくれていきます。

今後は復興復旧対策に力を注ぎます。ご理解とご協力を宜しく願います。

さて、自治体国際化協会北京事務所の日中地域間交流促進セミナー(福建省福州市)で基調講演とパネルディスカッションに登壇し、多久市、孔子の里、論語カルタを紹介しました。「こんな熱心な取組みが日本にあると初めて知った」「感激した」「子供たちが論語を学ぶのが素晴らしい」「人づくり重視に感銘した」等の言葉を頂きました。

講演では、「恕」こそが今世紀に大事な理念であるとも提唱しました。

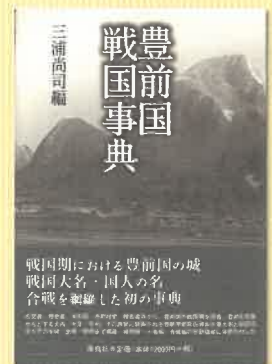
いくつになっても思いやり

帰路は北京で孔子直系七十七代子孫である孔徳懋先生を訪ね、百三歳の長寿祝とお見舞いを申し上げました。孔子直系子孫で最長寿であり、お健やかに過ごして下さるが、脚力が弱ったことを気にされていました。

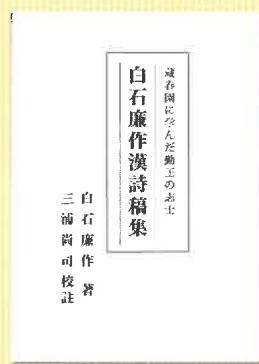
「お茶をどうぞ」「エアコンは丁度いいですか」等、ご配慮が細やかで、現地通訳者は「あんなに気づきと心遣いをされる百歳は初めてです。素晴らしい」と感銘しきり。

ご配慮頂きながら、いくつになっても自分以外の人への配慮や思いやりを忘れてはいけないと改めて教えられる思いがしました。かねてより「恕」の大切さを説かれる徳懋先生は、論語にある「生涯を貫く教え」を深く胸に刻まれ、実践され、私達に教えて下さっていると感じます。

十月は紅葉です。災害を越えて進みましょう。紅葉狩りにお出かけ下さい。



④豊前国戦国事典



③白石廉作漢詩稿集



②菅原道真公欽慕漢詩集



①立花玉蘭の『中山詩稿』を読む

九州国際大学法学部特任教授
福岡県漢詩連盟会長
三浦尚司先生寄贈図書

多久出身の

藩医・西岡春益と 佐賀の漢学者集団(二)

一名君鍋島治茂からの篤い信頼
佐賀大学 准教授 中尾友香梨

西岡春益は第八代藩主・鍋島治茂(一七四五)一八〇五、佐賀藩中興の祖と称される名君)の篤い信頼を一身に受けていた。治茂が春益に宛てた書簡からその様子が窺える。書簡の内容は治茂の遺稿集『維適園集』(鍋島報効会蔵)に収められているが、日付が省略されているので、具体的にいつごろ書かれたものかは不明である。ただ佐賀から江戸にいる春益に送ったことはたしかである。紙幅の都合により、一部のみを紹介しよう。

汝は父祖の業(医業)を受け継いで、杏林に傑出し、四方の難病患者がみな汝の治療を受けて快癒している。汝はまさに今日の董奉である。陰気の厳冬に春の陽気をめぐらす者は、汝のほかには誰がいるだろう。

(原漢文、意識、以下同様)

「杏林」とは、中国古代の名医・董奉が患者の病気を治しても報酬を受け取らず、代わりに記念として杏の木を庭に植えさせたところ、数年後には立派な杏の林ができたという故事に由来する言葉で、医師の美称。治茂は春益を「今日の董奉」であるとはめめたたえる。また、「陰気の厳冬に春の陽気をめぐらす」とは、患者の病気を治して健康を取り戻させ

ることのたとえであり、春益のたしかに医術に対する治茂の高い評価が窺える。書簡の続きを見よう。

汝の儒学の学問や道義は、先に国都(江戸)で名を轟かせ、深遠な学業は名実相伴っている。誠に賞賛すべきである。顧みるに、汝は日夜、医業に務め、東に請われ西に聘され、落ち着く暇もない中でも、余力を摘藻(詩文をつくること)に注ぎ文事をすてることはなかった。なんとすばらしい志であらう。

当今の文筆家といえば、文を得意とする者は書を善くせず、書を得意とする者は文を善くせず。これをたとえれば、航海用の帆を山では操ることができないようなものだ。そもそも両方を兼ね備えるのは難しいことである。

しかし汝はすでに医術にすぐれ、学問(儒学)に篤く、文を綴ることにたくみであり、書も善くしている。まるで夏の禹王が四載(舟・車・輻・標の四つの乗り物)を操縦して、洪水を山に、河に、海に、陸に治め、行つて通らないところがないようなものだ。達材というべきである。はなはだ羨ましい。

ここではまず、春益が儒学の学問や道義をもって江戸で名を馳せたことを述べる。春益は儒医であり、当然若い頃より儒学を修めたと思われるが、その学識や道義が碩学の集まる江戸においても名を轟かせたほどのものであったとは、やはり驚きを禁じ得ない。

では、春益がいつごろ何のために江戸に出たのか。まだ春益の詳しい生涯がわからないので、断定はできないが、おそらく儒学の修業のために江戸に遊学し、宝暦十年(一七六〇)頃に佐賀藩七代藩主・鍋島重茂の娘(数姫か)の侍医として召し抱えられ、そのまま江戸藩邸に仕えていたと推測される。

治茂が春益に感心するもう一つの理由は、医師となつて四方より治療を請われ多忙をきわめながらも、余力を文事に注いで怠らなかつたことである。たとえ文筆家であっても、文と書の才能を兼ね備えることは難しいのに、春益は医術・儒学・詩文・書の四つの領域において才能を発揮しており、それはまるで中国の夏の禹王が、四種類の乗り物を使い分けて、山・河・海・陸の間を自由自在に行き来しながら治水を成功させたようなものであるとほめたたえる。書簡はさらに続く。

先日、寡人(天子や王侯の自称)は汝に命じて鄙稿(自分の原稿をへりくだつていう語)を浄写させたが、できあがつたものを見ると、楷書で記された文字は端正で、一画もいい加減に書かれたものではなく、まるで版木で刷つたかのようなものである。このような腕前は、世に能書家と称される者でも、おそらく超えることができないだろう。だからわたしは、これ(春益に浄写してもらつた自分の原稿)を千金の価値があると見ており、愛玩して手から離さず、なんとお礼を言えばいいのかかわからないほどである。

治茂は自身の詩文の原稿を春益に清書させ、そのすばらしいできばえに感嘆している。一字一画もゆるがせにせず楷書で端正に書かれた文字は、はなはだ美しく、まるで出版されたものようであるという。そして「このような腕前は、世に能書家と称される者でも、おそらく超えることができないだろう」というのは、春益の書に対する治茂の最高のほめ言葉でもある。

さらに興味深いのは、この書簡に同封した治茂の律詩二首のうち、一首の尾聯に、次のように記されていることである。

且欽翰墨聊同趣

且つ翰墨を欽み 聊か趣を同じ

業在緇衣第一章

業は緇衣の第一章に在り

「欽む」とは仰ぎ慕うこと、「翰墨」は詩文を作ることや書画を書くこと。したがってこの尾聯の第一句（律詩第七句）では、春益の詩文や書画を仰ぎ慕い、趣味を同じくすることをいう。

続いて結句の「緇衣第一章」とは、「詩経」緇衣篇の第一章「緇衣之宜兮、敝予又改爲兮。適子之館兮、還予授子之粢兮」(緇衣の宜しき、敝れなば予又た改め為らん。子の館に適き、還た予子の粢を授けん)を指す。

『詩経』のこの歌については、古代と近現代で解釈が分かれており、近現代では気に入った男性を恋慕う女性の歌としてとるのが基本だが、古くは春秋時代の鄭の武公が賢才の拔擢に努めるさまを詠んだ歌とされていた。治茂の詩ではいうまでもなく古代の解釈をとっており、大業（藩政）の成功のかぎは人材登用にあるので、自分は春益のような賢才を積極的に拔擢したいという思いを、この結句に托したと考えられる。

治茂は明和七年（一七七〇）に佐賀藩主となり、一連の藩政改革を成功させて数々の大きな業績を残したが、そのかぎとなったのはまさに積極的な人材登用である。この時に拔擢されたのが、古賀精里、石井鶴山、長尾東郭などであり、ほかにも多数いる。そして彼らの献策によって、六府方の設置、それによる干拓と新田開発、物産の国産化など、殖産興業政策が実施され、天明元年（一七八一）には人材養成のための藩校弘道館も創設された。

前述したように、治茂が春益にこの手紙を書いたのは、春益がまだ江戸藩邸の奥医師として仕えていた頃であり、治茂はそのポジションにいる春益をさ

らに拔擢・重用したいと願ったのであろう。その思いはやがて現実となり、本誌前号にも記したように、春益は安永四年（一七七五）頃より佐賀に移動となり、同じく藩医として拔擢された江上友益らとともに薬種を栽培したり、薬種の取れる地域の人々に薬種の採取について教授したりして大活躍した。

これらは佐賀藩が殖産興業政策の一つとして導入した国産薬種開発事業にあたるものであり、治茂は自身が拔擢した藩医たちに大きな期待をかけていた。それは治茂の次の漢詩からも窺える。

間劉岡二医採藥北山寄贈

劉、岡の二医、薬を北山に採るを聞き、寄贈す

刀圭夙識国工名 刀圭 夙に識る 国工の名

驚葉峰峰此啓行 葉を驚めんとて峰々此に啓行す

湿露青囊開區藹 露に湿う青囊 區藹を開き

擠雲短屨踟崢嶸 雲を擠す短屨 崢嶸を踟む

鑣穿鴉井丹砂出 鑣もて鴉井を穿てば丹砂出で

梯上龍巖石髓生 梯もて龍巖に上れば石髓生す

時浴仙源堪換骨 時に仙源に浴せば骨を換つるに堪

詎須航海訪蓬瀛

詎くんぞ航海して蓬瀛を訪ぬるを 須いん

題の「劉」と「岡」はそれぞれ藩医の劉友益（江上友益）と西岡春益を指す。二人が北山（脊振山か）に登って薬種を採取することを聞いて、その辛苦をねぎらう内容の詩である。第一句の「刀圭」は薬を調合するさじ、「国工」は名医。藩医たちの薬さじにそれぞれの持ち主の名が記されていることに、二人の名医のすぐれた医術を薬さじはよく知っているはずという意味をかける。第二句の「啓行」は出発すること。二人が薬種を採取するために高い山々を

目指して出発することをいう。

第三句の「青囊」は薬袋、「區藹」は草木が敷き繁るさま。第四句の「擠す」は落とすこと、「短屨」はわらじ、「崢嶸」は山が高く険しいさま。領聯では二人が茂った草木を分けながら、高く険しい山に登る様子を想像する。

第五句の「丹砂」はの硫化水銀、消炎・鎮静に用いる漢方薬の材料。「鴉井」は「老鴉井」、丹砂がとれる石の穴倉。第六句の「石髓」は鍾乳石、炭酸カルシウムを主成分とする鉱物で、やはり漢方薬の材料。「龍巖」はとぐろを巻いた龍の形をした巖のことか。頸聯では二人が石の穴倉を掘ったり、高い巖の上にある洞窟にもぐったりして、漢方薬の材料となる鉱物を採取する様子を描く。

第七句の「仙源」は仙人のいる所、俗人の行けない仙境。第八句の「蓬瀛」は蓬萊と瀛州、ともに東の海にある仙山とされる。尾聯では二人が薬種採取のために深山に入ることを、仙境をたずねることにたとえる。

このように、名君鍋島治茂は西岡春益をはじめ自身が拔擢した藩医たちに大きな期待をかけ、春益らもまたその期待に精一杯応えた。そうした延長線上に誕生したのが、本誌前号の冒頭でふれた佐賀の名物、野中烏犀圓である。当時、佐賀藩は他藩の産物の移入を禁じ、日本全土に展開していた富山売薬商の藩内への出入りも禁止していた。国産薬種の開発と薬剤産業を奨励するためである。この政策にうまく乗ったのが、佐賀の材木町で薬種商を営んでいた野中家であり、野中家による烏犀圓の製造と専売の許可の吟味に携わった人物の一人に、多久出身の藩医・西岡春益がいたのである。

廣瀬淡窓の書

「東原精舎會賦呈」紹介

公益財団法人孔子の里

常務理事

服部 政昭

昨年(平成三十年)の十月末、多久市観光協会より東原座舎へ一通のメールが転送されてきた。日田咸宜園の廣瀬淡窓が東原座舎諸君に贈った書の掛け軸を所持している旨の事であった。早速、淡窓の日記から多久へ来た記録を捜す、国会図書館デジタルコレクション「淡窓全集・懷舊樓筆記」の中で多久を訪れた記録および東原精舎會賦呈の律詩を確認することが出来た。その後、メール主と連絡を取り合い、愛知県豊明市のT氏より、今年の二月に書を入手したので紹介をしたい。

廣瀬淡窓は豊後の国(大分県)日田の人で、私塾・咸宜園を開き、三千余人の門弟を育成した教育者・漢詩人として著名な江戸後期の儒者である。

天保十三年(一八四二)、淡窓が六十一歳の時、大村藩(長崎県)の招聘をうけて、九月三日に日田を發して久留米、神埼、境原、佐賀、牛津、武雄、嬉野、彼杵を通り、八日に大村に至り、藩校五教館において講義を行い、約一ヶ月滞在し、長崎の孔子廟などを訪ねて、十一月二十六日に大村を發ち、帰路の途中、二十八日、多久に入っている。

まずは往路九月の日記を見てみる。

九月三日。家ヲ發シテ。大村ニ赴ク。(中略)

五日。逆旅主人字ヲ請フ。二葉ヲ書シテ與ヘタリ。

發スル時。主人送ツテ街口ニ至ル。境原驛(佐賀県神埼市千代田町)ニ至ル。恒遠頼母(つねとう)たのも、豊前の儒者)カ長崎ヨリ歸ルニ遇ヘリ。一店ニ投シテ談話シ。刻ヲ移シテ別レタリ。佐嘉二達ス。巒三郎(御厨巒三郎、佐賀人、淡窓の門人)來迎ヘタリ。及佩川ノ弟子富岡左次郎同シク來レリ。導イテ一家ノ樓上ニ至リ。休ハシム。佩川來リ見エタリ。佩川姓ハ草場名ハ韃。字ハ隸芳通稱ハ蹉助。佩川ハ其號ナリ。予ヨリ少キコト五歳ナリ。初ハ多久ノ家臣ナリ。近來擢テラレテ佐嘉候ノ儒臣ト為ル。予是ト書信往復スルコト二十年。

今初メテ相見ス。佩川曰ク。拙家ニ奉迎スヘシトテ。家ニ歸リ。人ヲシテ迎ヘシム。乃伊織・祐之・逸作ト共ニ行ク。大村諸子ハ旅店ニ留レリ。佩川酒飯ヲ供ス。次男大次郎出テ見ユ。既ニシテ藩中ノ諸士。永山十兵衛(永山貞武、号三水、迂亭、のち藩校弘道館の助教。福島文藏。田中太郎左衛門。石橋六郎。大東朝次郎。張常一郎。枝吉平左衛門(枝吉種彰、号南濠、のち藩校弘道館教授。枝吉神陽、副島種臣の美父。武富文之助(武富圯南、号碧梧樓、歎翁。のち藩校弘道館教授)。鶴田平治(鶴田斌、号嫩陀。のち多久郷校教授。鶴田皓、高取伊好の美父)來リ見ユ。佩川ノ塾生ハ。西川文九郎。中尾健吉。桂橋善。徳永彰(号は桐岡、鶴軒。のち多久郷校教授)相見ユ。詩ヲ以テ贈レリ。此内永山・武富ハ十八年前予カ家ニ來訪セシ者ナリ。鶴田ハ昔年須惠ニテ暫ク同宿シ。其後モ來訪セシ者ナリ。其他ハ皆生面ナリ。桂橋・徳永皆詩ヲ贈レリ。其通稱ハ忘レタリ。佩川ノ宅ハ官舎ナリ。旅人安ニ至ルコトヲ得ス。巒三郎カ先容セシニヨリ。豫メ官ニ請ヒ得タルナリ。永山以下。皆學館中ノ人ナリ。皆饗宴ニ與ル。學館ヨリ饋ル所ナリ。諸子皆予ニ益ス。往復頗ル繁シ。殆ト半日ニシテ。佩川ノ宅ヲ辭

シ。牛津驛ニ至ツテ留宿セリ。佐嘉ヨリ二里ナリ。逆旅ニテ既ニ臥セントセシ時。佩川忽然トシテ。來賓雜速トシテ。談話ニ便ナラス。故ニ又此處マテ來レリト。其門生中尾健吉從ヒ來レリ。乃逆旅ノ主人ニ命シテ。酒ヲ供セシム。談話時ヲ移ス。而後佩川ハ逆旅ノ近隣ニ相識ノ家アルニ因ツテ。往イテ投宿セリ。佐嘉ニテ佩川ニ贈ル詩アリ。曰ハク。

隣邦亦仰大藩風
政化偏知啓沃功
諫草成時殘月落
講筵同處夕陽空
千秋正學承元晦
萬首新詩近放翁
傾蓋何妨如舊識
神交久在夢魂中

隣邦亦た仰ぐ大藩の風
政化偏に知る啓沃の功
諫草成る時残月落ち
講筵より回る処夕陽空し
千秋の正學は元晦を承け
萬首の新詩は放翁に近し
傾蓋何ぞ妨げん旧識の如きを
神交久しく夢魂の中に在り

隣国でまた仰ぐ、大藩の風格を
よき政治と教化にただ知る、臣下が率直に君主に上申することのすぐれた効果を
諫草の草稿ができあがる頃、夜が明け
(臣下である佩川が徹夜で君主への諫言の草稿を作成することをいう)

君主への侍講から帰って来た頃には、もはや
日が沈んでいる

(佩川が遅くまで熱心に君主のために儒学の

講義を行うことをいう)

千秋の正学(佩川の儒学)は、朱熹の説(朱子学)を承けており

万首の新詩(佩川の詩作)は陸游に近い(佩川の詩作の多さをいう)

あなた(佩川)とはちよつと会つただけなのに、まるで旧知のように親しみを覚える

(それはこれまで面識はなくとも)心と心の交わりが、まるで夢を見るように久しく行われてきたからであるのだ

(佩川とは面識がないまま二十年間、文通を行つたことをいう)

牛津ニテ贈ル詩二曰ハク。

盃酒榮城既盍簪

知君夜半敲門意

栄城に盃酒し 既に盍簪あるも
牛津の駅裏 更に相尋ぬ

牛津驛裏更相尋

未盡平生一片心

知る 君の夜半に門を敲くの意
未だ尽くさず 平生一片の心

佐賀にて杯を交わし、すでに集いをもつたにもかかわらず

あなた(佩川)は牛津駅まで訪ねてくれた。わたしは知っている、あなたが夜半にわたしの宿の門を叩く真意を

日頃に積もつた思いを、(佐賀のつどいでは)語り尽くせなかつたのだらう

是日途中ニテ。始メテ温仙嶽・多良嶽。及ヒ菽

城ノ諸山ヲ天際ニ見ル。佐嘉ノ壮麗。大畧久留米

ト類スルニ似タリ。是モ道上ヨリハ城廓及ヒ卿太

夫ノ家ヲ見ルコトヲ得ス。其詳ナルヲ知り難シ。

六日朝。佩川ノ旅宿ニ至リ談話ス。其主人毛相見ル。

姓名ヲ忘レタリ。牛津ヲ發シテ。北方驛ニ至リ午

飯ス。武雄驛ニ至ツテ留宿ス。温泉アリ。(以下略)

『淡窓全集』懐舊樓筆記 卷四十八 天保十三壬

寅年十一月 年六十一

(前文略)

廿八日。雨晴ル。卯牌(午前6時)。武雄ヲ發シ。

北方驛ニ至ル。鹿之助(多久家臣、淡窓門人、福地鹿之助)・岩五郎(多久家臣、淡窓門人、音成岩五郎)

此處ニ在ツテ相待テリ。

初メ西在三郎(西賢、号鼓岳。のち多久郷校助教兼監察。佩川の従兄弟)・藤崎小左衛門(藤崎熊一郎、号静所。咸宜園の都講。のち多久郷校教授。佩川の三女静の夫)ヨリ言ヲ傳ヘテ。予カ帰路多久ニ過ランコトヲ請フ。予之ヲ諾ス。故ニ二生ヲシテ迎ヘシムルナリ。

是ヨリ生路ニ就ク。其路北ニ向ヘリ。馬髮嶺ヲ越

エテ行クコト一里餘ニシテ。多久ニ達ス。小左衛

門路ニ迎ヘテ。乃導イテ逆旅ニ就ク。在三郎モ亦

来リ見ユ。良アリテ。多久大夫ヨリ瀬田八衛門ト

云フ人ヲ使トシテ。来リ勞セシム。其言ニ曰ハク。

昔年ヨリ。家隸ノ輩。貴門ニ遊ヒ。教導ヲ辱クス

ルコト。深ク感佩スル所ナリ。今敝邑ニ駕ヲ枉ク

ルトヲ聞ク。故ニ一會ヲ以テ。謝意ヲ述ヘ。且不腆ノ品ヲ進呈スト。唐紙二百枚ヲ贈ラレタリ。時

積翠空濛生千嵐 緋纈一絲入紅橘 多儒即藝今都

魯大邑 寧非古子男 泉送珮際 吟地底 山連屏障限

天南嘉 筵何幸 叨克寵 如國 泊生足美談

東原精舍會賦呈 丹丘諸君

廣瀬建拜

廣瀬求馬（廣瀬淡窓）、大村藩の招聘の帰路、多久に立ち寄る。人足七人馬二疋。

松千代様（多久家第十一代領主多久茂族）より、お使いを以て唐紙一本と杉原紙色に水引にのしを添えて贈られた。高名な儒学者に付、頭人中が挨拶に出向く。右の旅宿は多久町手嶋善助宅。扱、又後使者主従三人且継肩絹着用之事

今程弥御安全珍重に存じ候。今度当所御立ち寄りられ、別して忝く、扱先年以來此方家来内より数人罷り越し、御取り立てに預かり、此内と候ても打ち替り罷り越し候義も御座有るべく、尚又宜敷相頼まれ候。随つて是式乍ら唐紙一品差し遣され候由。

天保十三年（一八四二）、六十一歳の高齢に達していた廣瀬淡窓は、長崎大村藩の招聘を受けた時から、佐賀を通る時に佩川との面会を考えていたようである。門人で佐賀の人御厨轡三郎を同行させ、旅の途中で轡三郎を先に佐賀へ走らせて、佩川との連絡を取っていたようだ。九月五日、淡窓が来るのを轡三郎が出迎えて佩川の官舎に案内をしている。佩川の家には枝吉南濠、永山二水、武富圀南を始めとして佐賀藩校弘道館の秀才たちや佩川の塾生たちが集まり歓迎の宴を設けている。

朝六時に神埼の宿を出発して、境原を通り、佐賀へ着いた。歓迎の宴は半日におよび、佩川の家を出て牛津の宿に着いた時は日暮れに達していた。夜、寝ようとしていたら突然に佩川が訪ねてきた。如何したんだと訪ねると、昼間は人が多くて話が出来なかったから、此処まで追ってきたと。宿の主人にお願いをして、酒を飲みながら話をした。佩川は宿の近くに知り合いの家があるからと言って帰って行った。翌朝、佩川の泊まっている家に行つて話をした。その家の主人とも対面したが名前は忘れてしまつ

た。と記している。

私は佩川と書信を往復すること二十年。今回、初めて会った。という淡窓。夜も翌朝も会つて話をしたいと思う二人の気持ちと喜びが伝わってくる。

淡窓は佩川との親交二十年と書いているが、私の拙い知識では、佩川が古賀精里に同行して朝鮮通信使の迎接のために対馬に行く時に、淡窓が「送草場佩川之對馬」の詩を贈り祝しているのは、文化八年（一八一二）の時と思う。今回、二人が会つたのは天保十三年（一八四二）。実に二人の親交は三十一年に及んでいる。

帰路、天保十三年十一月二十八日、朝六時に武雄を發つて北方に着く。北方には、前年の天保十二年に咸宜園に入塾した多久家臣の福地鹿之助と音成岩五郎が待つており、二人の案内で馬神峠を越えて多久に入る。多久では天保八年に咸宜園に入塾し三年で都講（塾頭）に挙げられた俊才・藤崎熊一郎の出迎えを受けて宿に入っている。宿には西贊（鼓岳）が挨拶に来て、暫くすると多久領主の使者として瀬田八衛門が見えて、昔から家臣たちが淡窓の塾に入門して教導を受けていることに謝意を述べて、唐紙二百枚を贈られている。聖廟に詣でて設立の経緯を聞いてから郷校東原精舎に入る。郷校の教授・深江順房を始めとして多くの教諭および儒員たちが集まり、お持て成しの酒宴が開かれ、この席上で詩を賦し書をしたためた。

この書が百七十数年ぶりに多久へ帰つてきた掛軸である。


淡窓は、儒者の多さに、まるで鄒魯のようだと感心し。自分は私塾（咸宜園）で、束脩（入門料や授業料）をいただき、門人の親からは謝意を述べられることはあるが、門人の領主からお礼を言われたり、持て成しを受けたのは初めてである。故郷（日田）

へ帰るのに良い土産話が沢山できた。と喜んでいる。私はこの書で、郷校東原精舎は、この天保の時代には精舎の文字が遣われているのを確認が出来たと。また、この頃から多久の事を「丹邱」の美称で呼ばれていたことを確認出来たことを嬉しく思う。


【参考文献等】

- ・「淡窓全集」懐舊樓筆記 卷四十六・卷四十七・卷四十八（国会図書館デジタルコレクション）
- ・「役所日記」（多久市立郷土資料館蔵）
- ・「鶴山塾」近世（江戸時代）に多久を訪れた人たち（令和元年八月二十四日講座資料（大園隆二郎））
- ・淡窓の漢詩の読み下し、意訳は、中尾友華梨先生のご指導をいただいた。
- ・原文中の（ ）内は、筆者注。

公益財団法人 孔子の里 販売物 (税込)



◇論語 日めくりこよみ
700円



◇百人一首式 論語カルタ
2,500円

当財団HPもしくはAmazonでも販売しています。

🔍 百人一首式論語カルタ 検索

問い合わせ先 公益財団法人 孔子の里 電話 0952-75-5112

多久家文書
『水江事略』(翻刻文)紹介 4

長信公譜二 永祿元年戊午ヨリ同年十二年己巳ニ至ル

水江事略卷之三 長信公譜之二(上)

永祿元年戊午 長信公御年二十一

冬十一月隆信公軍ヲ率ヒテ東肥前ニ發行シ江上武種ヲ伐タル長信公手勢六百餘騎ヲ率ヒテ御出馬アリ隆信公ト共ニ境原ニ陣セラルル初メ隆信公小田政光ト和平セラレ政光筑後ヨリ來テ蓮池ノ城ニ歸リシニ依テ今度武種追伐ノ先陣ヲ政光ニ命セラル政光自ラ兵ヲ引テ發行ス犬塚彈正盛家(政光ノ婿)モ兵ヲ率テ繩島ヨリ發ス是又隆信公ノ催促ニ依テナリ政光ハ河西ヨリ北ニ向ヒ盛家河東ヨリ北ニ向フ武種城原ヨリ出テ犬塚ニ對シ神代勝利ハ武種ノ加勢トシテ西ノ手ノ政光ニ向ヒ相懸リニ兵ヲ交ヘ烈敷打戰フ事數刻ニ及フ東ノ手ニハ犬塚彈正本告義景相浦ニシテ武種ト本告邊ニ接戰シ互ニ蒐合シテ戰ヒ甚烈敷西ノ手牟田ノ防戰尤強フシテ神代終ニ政光カ軍ヲ討破ル政光使ヲ本陣ニ馳テ援兵ヲ乞隆信公繩島ノ邊ニ陣セラル其間甚近カリシカ共救フ事成難ク政光ノ軍大半討レ自身モ數ヶ所疵ヲ被リ馬モ亦勞ル斯リシカハ郎等小田右馬太輔犬塚左馬太夫(二人ハ政光ノ親族)山田河内守江口善左衛尉末次貞七郎栗林舜德齋以下數人主ヲ討セシト立塞テ討死シ政光モ終ニ矢ニ中テ死ス勝利ハ政光ヲ討取隆信公犬塚ト共ニ加勢アラン事ヲ察シテ手早ク兵ヲ引揚タリ犬塚ハ武種カ先陣服部カ兵ヲ兵ヲ粉ノ如ク討碎キ直ニ武種カ旗本ニ切懸ラントセシ所ニ西ノ手ノ軍敗レ政光危シト聞ヨリ當ノ敵ヲ打捨

政光ヲ救ハント兵ヲ引キ西ノ手ニ到リケレハ勝利只今兵ヲ引揚横内ニ赴キケリ隆信公長信公モ亦出會ハレシカハ兵ヲ合セ勝利ヲ追ヒ江上ヲ伐ツ其勢沛然トシテ河ヲ決スルカ如ク成シカハ敵方散々ニ破レ武種ハ日吉ノ砦ニ引退キ勝利ハ猿カ岳ニ引退ク佐嘉勢凱歌ヲ揚テ歸ル隆信公ハ此序ニ政光カ城ヲ取ラントテ直ニ蓮池に取懸リヒシヒシト城ヲ取囲ム城中ニハ大將政光討レ家臣ノ面々名ヲ得シモノハ政光ニ殉ヒ討死セシ跡ナレバ防戰フモノナシ真如坊澄能(太田村宝光院)カ扱ヒニテ終ニ城ヲ明渡ス依テ新九郎鎮光五郎九郎賢光以下男女五百餘人筑後ニ落テ坂東寺ニ入ル今度ノ合戰ニ小田家ノ臣名アルモノ數ヲ盡シテ討死ス隆信公福地長門守ヲシテ深町理忠カ妻子ヲ尋ネ求メシム長門是ヲ得テ隆信公ニ見ヘシム長門是ヲ得テ隆信公ニ見ヘシム隆信公御懇情ヲ加ヘラレ是ヲ扶助セラル是ハ先年水江御難義ノ時分理忠深切ノ取扱ヒ有シ故ナリ其後隆信公江上神代ヲ追伐アラントテ城原表ニ御出陣有長信公ノ家臣多ク是ニ從フ小田鎮光蓮池ノ城ニ歸テ和ヲ乞公ノ女ヲ以テ是ニ妻ス又舍弟長信政光ノ女ヲ娶ル両家和睦シテ公ヲ蓮池ニ饗ス

九月十三日隆信公神代ヲ征セラレントテ河上ニ發向シ進テ西山田ニ陣セラル先陣ハ古橋一游軒信了ニ陣ハ納富但馬守信景三陣ハ福地長門守信重ナリ三軍進テ星隈榎口乱橋ニ押寄ル長信公ハ手勢六百ヲ率テ河東都渡岐城原ニ相向ハル(家系事蹟 長信鑑兼後殿タリ)龍造寺御一族多ク是ニ属セラルカ上佐嘉村并萩原尼寺國府久松久保大石鑰尼ノ輩悉ク當手ニ属ス神代勝利同長良父子一族數千人山内ヲ出テ河上ノ坊家ヲ本陣トシテ榎口ヲ差堅メ勝利ノ次男清次郎周利八戸宗暘ト相備ニシテ原ノ口ヲ守ル宮原ノ防戰烈敷當手ノ先鋒一游軒カ軍破レ死創夥シニ陣納富東山田ヨリ押來リ三陣福地ハ星隈ヨリ寄來リ本陣ノ遲兵整々ト押詰拒戰フ數回ナリ此時河東ニモ合戰始リ短兵急ニ打テ懸リ山河モ崩ル、斗リノ有様ナリ長信公陣頭ニ進ミ士卒ヲ勵マシ進ノヤ者トモ一足モ退ク事ナカレト自ラ轡ヲ扣テ馳廻リ嚴敷下知シ玉ヘハ家臣村山常陸石井南里村岡飯盛古閑御厨及尼寺國分朽并萩原五領北村ノ郷士等數百人我劣ラシト先鋒ニ進ミ終ニ都渡城原ノ敵ヲ討破リ首ヲ得ル事若干ナリ神代清次郎周利討死シ八戸宗暘ハ疵ヲ被リ半死半生ノ体ニテ北山ニ引退ク長信公兵ヲ振ヒ勝聲ヲ發スサレハ一陣レテ殘黨全カラス勝利長良モ宮原口ニ討破ラレ素足ニシテ小城山ニ奔ル佐嘉勢北ルヲ遂テ山内ニ入ル勝利父子今ハ足ヲ留ルヲ得スシテ筑前ニソ落延ケリ隆信公今度ノ合戰大ニ勝利ヲ得玉ヒサシモ強敵ノ神代ヲ追シリゾケ其采地ヲ取り山内處々ニ代官ヲ居ヘ是ヲ守ラシム長信公今度ノ御功戰拔群ナリシカハ隆信公ヨリ尼寺村ヲ進セラル長信公地土久松源太左衛門北村掃部等ヲ御所望有テ臣トセラル渠等ハ皆上佐嘉ノ首長ニシテ勇力武功ノ輩ナリ就中此度戰場ニテノ働キヲ御賞美ニ依テナリ長信公水江東ノ館ニテ御婚禮有婦人ハ小田駿河守政光ノ息女(六女ナリ母ハ本告氏)當地蓮池ノ城主小田鎮光(彈正少弼)ノ妹ナリ今年十六(芳岩妙春)鎮光ノ家臣木村藏人及中村

冬十二月上旬神代勝利江上武種隆信公ト和平シ互ニ向後□變アルナシキノ神文ヲ出シ是ヲ河上ノ宝殿ニ納ム是ハ坐主増純ノ扱ヒニ仍テナリ同二年己未 長信公御年二十二 正月十一日太宰少貳冬尚城原勢福寺ノ城ニテ自殺ス江上武種逆心ヲ發シ是ヲ殺スト云同 月十八日千葉屋形胤頼小城ニ於テ滅亡ス 少貳時尚(冬尚改名)來テ千葉胤頼ニ依ル千葉胤連加勢ヲ乞テ時尚ヲ討ントス龍軍攻戰テ晴氣ノ城ヲ陥ル鑑兼戰功アリ胤頼自殺ス時尚没落シテ城原ニ潜ム江上武種自害ヲ勸ム時尚恨ヲ含テ死ス正月十一日ナリ爰ニ於テ胤連都テ小城郡ヲ領ス 同年辛酉 長信公御年二十四

長信公御年二十四

古澤婦人ノ御附人トシテ從來ル此度御婚禮ノ儀式萬
ツ隆信公ト御母公慶闇夫人ノ御取計ヲヒナリ
同五年壬戌 長信公御年二十五

六月隆信公馬場肥前守鑑周カ三根郡中野ノ城ヲ攻ラ
ル長信公士卒ヲ將テ是ニ從ハル三日カ間ノ城攻ニテ
城主鑑周力盡和平ヲ乞ニ依テ御歸陣有

有馬仙岩千葉龍造寺ヲ討テ佐嘉小城ノ地ヲ合セ領セ
ント思ヒ立子息義直ヲ大將トシ大軍ヲ遣シ龍造寺ニ
向ハシム藤津杵島松浦ノ郡士多ク是ニ從フ堤尾岳
(佐留士ニアリ)ニ據リ又丹坂牛尾ニ陣ス多久ノ城主

本田美作守純綱及田代刑部少輔等丹坂ノ先陣ニシテ
田中土佐守以下多久ノ地士多ク是ニ屬ス隆信公サ
ハ有馬ノ奴原討散サント小城表ニ出張セラル長信公

モ御出陣ナリ千葉胤連及鴨打徳嶋空閑持永窪田野
田西侍院佐嘉方ニ一味シ牛津江ヲ境ニ是ヲ守ル鶴田
越前守前**(上松浦獅子城主)**隆信公ノ加勢トシテ一

本松**(晴氣峠ニアリ)**ニ陣ス七月下旬隆信公未明ニ
兵ヲ出シ一戰ニ丹坂ノ陣ヲ討破リ右原ニ追詰討取首
數ヲ知ラス有馬一族安德上野介ヲ始メ數十人討死シ

又松瀬川ニ溺レ死スルモノ若干ナリ本田ハ破レテ多
久城ニ入ラント引行所ヲ鶴田追打テ數人ヲ討取ル相
浦田中**(日向守)**岩本土橋多々良等逃ル敵ヲ處々ニ

支ヘ是ヲ討ントス本田ハ山ヲ越テ横邊田ニ逃レ田代
ハ討死シ田中ハ羽佐間ニ引退ク
傳ニ云田代ハ元有馬ノ一族ナリ本田ト共ニ多久城

ノ加番トシテ西原ニ居ル田代構ヘト称スル其所ナ
リ刑部討死シ佐嘉軍多久ニ入ル時其妻子幼兒ヲ携
ヘ河古ニ走ル數年牢浪セシカ此兒生長シテ圓通寺

ニ居ル後終ニ長信公ニ仕ヘテ次郎左衛門ト称ス慶
長五年勢州津ノ城ニ於テ功ヲ現ハス
相神浦八平氏ニシテ多久氏ノ同姓ナリ代々相神浦

村ヲ領ス先年周家公多久御在城ノ時ヨリ志ヲ通シ
今ニ違變スル事ナシ仍テ此度モ龍家ノ催促ニ應ス
右衛門允ト称スル是ナリ

両公勝ニ乘シ直ニ多久城ニ發行セラレ軍ヲ二手二分
ケ長信公ハ追手長尾口隆信公ハ搦手中山口均シク進
ミ玉フ長尾兩門ノ村長米満倉富支ヘ防キシカ共長信

公忽チ是ヲ打破テ多久城ニ押詰ラル搦手ノ軍ト同時
ニ城ヲ攻メ奮戦ス兵悉ク打敗ラレ城主多久上野介力
盡テ南山ヲ越ヘ須古ニ奔ル多久氏爰ニ於テ領地ヲ失フ

往昔頼朝將軍ノ時多久ノ太郎平ノ宗時ト云モノア
リ多久ノ庄ニ封セラレ下リシヨリ當地ヲ領シテ居
住スル事數代三百餘年ニ至ル代々ノ名乗宗ノ字ヲ

通字トス上野介ハ宗時カ家督ナリ
龍造寺長信多久宗時カ梶峯ノ城ヲ攻落ス公長信ヲ
シテ是ヲ守ラシム 泰巖公譜

二公ハ城中ニ入テ其忠否ヲ糺シ不順ノ輩ハ是ヲ誅セ
ラル山内十人ノ村長一番ニ御味方ニ付ク土橋氏等其
臣魁タリ此時隆信公田中日向ニ命セラレ兄土佐ヲ誅

セシム日向ハ元ヨリ公ニ御味方シテ忠節ヲ盡ストイ
ヘトモ現在ノ兄ヲ殺サン事如何ニモ難義ニ存セシカ
ドモ公頻リニ御責アリ爰ニ田中掃部ト云者アリ土佐

ノ叔父ニシテ義心アル者ナリ日向ニ謂テ曰土佐ハ我
家ノ惣領ニシテ御邊ノ為ニハ兄ナリ今有馬ニ屬スル
トテ是ヲ不忠トハ申カタク只是義ヲ守ルカ故ナリ去

ナカラ御邊既ニ隆信ニ屬セシ上ハ其下知遁レカタク
我今土佐ニ代テ死スヘシ隆信幸ニ我ト土佐トヲ見知
ラス早我首ヲ持テ隆信ニ捧ケヨト其俣切腹ス日向ハ

止ム事ヲ得ス掃部カ首ヲ切テ隆信公ニ獻ス是ニ仍テ
土佐ハ命ヲ全フシテ子孫終ニ龍家ニ屬ス佐嘉多久鹿
嶋ノ田中氏皆日向カ子孫ニシテ羽佐間ヨリ出タリ

隆信公ハ長信公ニ命セラレ多久城ヲ守ラシメ自ラ軍
ヲ率テ上松浦ニ發行シ嚴木ニ陣セラル獅子岳ノ城主
鶴田越前守前二心ヲ抱クノ聞ヘ有ニヨリ試ニ是ヲ招

カル越前守嫡子神五郎**(刑部太輔上総介)**ヲ人質ト
シテ異心ナキヲ現ハス公大ニ悦ヒ神五郎ヲ納所村ニ
居カレ蒲原上総介ヲシテ懇ニ介抱セシム
翌年八月越前守神五郎カ加冠ヲ公ニ請テ刑部太輔

賢ト名乗ル公ノ御嫡子鎮賢公ノ一字ヲ賜ナラン中
比ハ上総介ト称シ天正ノ末五郎左衛門尉ト改ム法
名三清波多ノ家改易ノ後多久家ニ屬ス

隆信公嚴木ノ旧趾ヲ修シ砦ヲ構ヘ堀江越後守等ノ軍
士ヲ込メ獅子城ノ加番トス又波多上野守**(上松浦ノ
實主實志岳ノ城主)**及ヒ鶴田因幡守**(大河野城主)**等

ト鄰好ヲ修メ軍ヲ龍造寺ニ回ス
鍋嶋左衛門太輔信昌公**(今年廿五長信公ト御同年ナリ)**
古橋一游軒ト相謀リ堤尾岳ニ夜懸シテ有馬衆ノ本陣

ヲ討破ル是右原合戦ノ夜ナリ有馬ノ兵横邊田ニ引退
ク
有馬仙岩味方ノ敗軍多久城没落ノ注進ヲ聞テ大ニ驚

キ義直ヲ遣シテ藤津ニ在陣シ境ヲ守ラシム又須古城
ヲ以テ龍造寺ノ押ヘトス爰ニ有馬ノ幕下ニ諸江右衛
門太輔ト云者アリ横邊田ニ在テ山口ノ柵ヲ守ル山口

ノ村長田嶋彦左衛門長信公ニ告テ曰某諸江ヲ討取テ
忠ヲ顯ハサント存候ヘトモ微勢ニシテ所存ヲ達シ難
シ少々御加勢下サレタシト云長信公退兵百十ヲ遣

シ御加勢アリ田嶋導シテ諸江カ柵ヲ夜討シ散々ニ打
破ル諸江カ兵ハ甲冑ヲ着ル間モナク七顛八倒西ヲサ
シテ逃奔ル我兵是ヲ追テ志久ノ十三塚ニ追詰卒ニ右

衛門太輔**(田嶋其首ヲ得タリ)**以下百餘人ヲ討取テ歸
ル長信公大悦ヒ御感状ヲ下サレ其勲功ヲ御賞美有テ
山口村ノ司トセラル隆信公モ其功ヲ賞セラレ御刀

(鬼神太夫)一腰ヲ賜ル此以後山口村多久領トナル村
ニ諸江塚ト称スル所右衛門太夫ヲ葬リシ所也トソ
按スルニ井手ノ左大臣橋ノ諸兄公ノ末裔杵嶋郡潮

見ニ在テ橋家ト称スル者多シ洪江一黨是ナリ右衛
門太夫モ又諸兄公ノ後胤ニシテ江ト誤ル歟
(以下次頁)

《儒林》

多久では先覚者・先賢を儒林と呼んでいる

鶴田 沖 (一七二七〜一七五六)

字元逸、通称元徳、九阜と号する。

多久家家臣鶴田忠(松山)の三男として享保十二年に生まれる。祖父鶴田精(省菴)、父松山ともに京都で儒学を修め、省菴は多久聖廟創建時に郷校の助教兼監察として、松山は郷校の教授として功績を残している。長兄の彦左衛門寛(平山)は、京都に遊学し帰郷の後、宝暦三年に『岩屋鶴田氏家譜』全五巻を執筆している。

郷校で学び、祖父、父、長兄と同じく京都に遊学するが、祖父、父は儒学を学び、長兄は兵学を学び、沖は古方派医師吉益東洞に入門し医学を学ぶ。

師東洞の医説を収録した『醫断』(東洞吉益先生門人鶴田元逸著)という書物を編集し、延享四年(一七四七)に序文を書いているが、出版されたのは宝暦九年(一七五九)で、沖が亡くなった後である。また、『吉益家門人録』(宝暦改元之冬 門人

西肥 雀沖 選)の編集を行い、通刺を書いている。

家祖は上松浦黨、獅子城主の鶴田越前守前。文禄二年(一五九三)、上松浦黨主波多三河守親が豊臣秀吉の怒りに触れて改易され一族は離散する。前の嫡子上総守賢、二男甲斐守順次、三男久善坊豪海は

供に慶長年間に龍造寺六郎四郎家久(後多久家初代領主多久安順)により、多久家の家臣として仕えることになる。

鶴田家は、多久家諸系図をみれば、巻二馬乗通並同格中三十一家中に二家、巻四平士中四十四家中に六家の計八家があり、沖は、鶴田越前守前の二男甲斐守順次家に生まれるが、前の嫡男賢の三男鶴田五郎左衛門尉俊を祖とする鶴田四郎太夫近の養嫡子として家を継いでいる。

系図には、「學醫、元徳、族人四郎太夫近嗣、宝暦六年子十月十七日卒、法名鶴林道仙、墓在于中多久白樫」と記され、宝暦六年(一七五六)、三十歳で没したことがわかる。

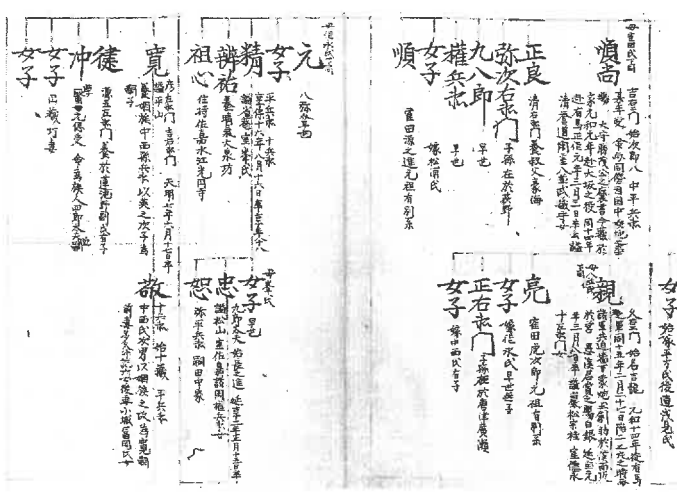
鶴田家の墓は、東多久町別府中村の墓地、多久町宮浦松山の墓地。中多久白樫墓地(現、多久町選分白樫)が知られているが、沖の墓は養父母近の墓と共に白樫に眠っている。(服部)

【参考文献】

- 『舊多久邑人物小誌』(舊多久邑史談會、一九三二年)
- 『多久市史』人物編、(多久市、二〇〇八年)
- 『日本醫學史雜誌』通巻第一五〇一号 「吉益家門人録」町泉 寿郎(日本医史学会、二〇〇一年)
- 『上村病院二五〇年史』(医療法人春陽会うえむら病院、二〇一五年)
- 『多久諸家系図』鶴田家系図(多久市郷土資料館蔵)
- 『水江臣記』由緒(秀村選三編集、多久古文書村、文献出版、一九八六年)



鶴田 沖 墓碑(多久町選分白樫)



多久家諸系図 巻二 鶴田 沖の系図

肥前国多久邑八景詩紹介(其の六)

船山暮雨

勢似巨舩凌碧霄

暮天風樹自蕭蕭

黄昏著雨遠相望

最上片雲帆影遙

勢は巨舩に似て 碧霄を凌ぐ

暮天の風樹 自ら蕭蕭

黄昏 雨を著けて 遠く相望めば

最上の片雲 帆影遙かなり

諸官快堂 林信允土俵甫

船山風景好

終日有幽情

惆悵朝雲影

寂寞暮雨聲

船山 風景好し

終日 幽情有り

惆悵 朝雲の影

寂寞 たる暮雨の聲

経筵講官 林信 智卿



賛助会員 名簿

団体(法人)会員

- 株式会社音成印刷 佐賀県小城市
- 株式会社佐賀銀行多久支店 佐賀県多久市
- 脇町漢詩教室 徳島県美馬市

個人会員

- | | | | |
|--------|----------|-------|-----------|
| 阿部 清澄 | 大分県大分市 | 谷村 正俊 | 福岡県那珂川市 |
| 荒谷 薫 | 多久市南多久町 | 田沼 裕樹 | 千葉県松戸市 |
| 井浦 敏彦 | 福岡県福岡市 | 辻 幸春 | 福岡県田川郡香春町 |
| 諫山 匡矩 | 佐賀県小城市 | 土川 泰信 | 東京都江東区 |
| 石黒 清治 | 栃木県足利市 | 長岡 巨知 | 神奈川県大和市 |
| 泉田辰二郎 | 熊本県熊本市 | 西田 進 | 石川県金沢市 |
| 磯田 信 | 兵庫県三木市 | 西田三千男 | 熊本県八代市 |
| 伊藤あけみ | 福岡県福津市 | 野口 秀利 | 多久市南多久町 |
| 岩永 幸太 | 佐賀県鹿島市 | 野口 康子 | 福岡県福岡市 |
| 大坪正一郎 | 多久市南多久町 | 服部 政昭 | 多久市南多久町 |
| 大森 一廣 | 福岡県福津市 | 平兮 正道 | 福岡県福岡市 |
| 鹿江 寛二 | 多久市多久町 | 藤井 次郎 | 神奈川県横須賀市 |
| 亀川 将平 | 佐賀県佐賀市 | 藤川俊二郎 | 長崎県佐世保市 |
| 菊池 健 | 宮城県仙台市 | 測上 哲也 | 多久市北多久町 |
| 北島 一明 | 多久市南多久町 | 古田 光子 | 神奈川県川崎市 |
| 北島 繁安 | 多久市南多久町 | 堀 哲 | 神奈川県横浜市 |
| 木村 美奈 | 佐賀県佐賀市 | 前田 隆弘 | 兵庫県姫路市 |
| 古賀千恵子 | 佐賀県佐賀市 | 松本 繁 | 多久市多久町 |
| 小路 清美 | 多久市南多久町 | 三浦 尚司 | 福岡県福岡市 |
| 佐野佐喜子 | 岐阜県岐阜市 | 三島 弘孝 | 大阪府大阪市 |
| 塩澤 一保 | 長野県茅野市 | 三ツ橋文子 | 群馬県桐生市 |
| 篠崎 義道 | 福岡県北九州市 | 宮岡 成夫 | 大分県大分市 |
| 陣内 清春 | 多久市多久町 | 村上 健夫 | 佐賀県伊万里市 |
| 陣内 佐由里 | 多久市多久町 | 村上 良明 | 神奈川県横浜市 |
| 住田 笛雄 | 神奈川県川崎市 | 桃井 猛 | 大阪府大阪市 |
| 副島 陽子 | 佐賀県佐賀市 | 森 四朗 | 佐賀県嬉野市 |
| 高島美津子 | 佐賀県鳥栖市 | 山崎 仲悟 | 佐賀県伊万里市 |
| 高津 有二 | 神奈川県海老名市 | 中山 正道 | 東京都品川区 |
| 高橋 信敏 | 北海道網走市 | 山本 武雄 | 大阪府堺市 |
| 武田 昌孝 | 山形県山形市 | 吉永 学弘 | 大阪府交野市 |
| 田中 英徳 | 兵庫県明石市 | 若林 浩 | 兵庫県宝塚市 |
| 谷 知子 | 福岡県福岡市 | 鷺野 直美 | 千葉県船橋市 |

令和元年度 多久聖廟 秋季積菜・孔子祭のご案内

日時 令和元年10月27日(日)
10時30分～13時10分

場所 多久聖廟

執事・俗人 入場	10時00分～10時20分	④ 幼児太鼓	11時50分～12時00分
献官・祭官 入場	10時20分～10時30分	⑤ 花棒舞	12時10分～12時20分
① 積菜(せきさい)	10時30分～11時30分	⑥ 孔子の里腰鼓	12時20分～12時35分
② 積菜の舞	11時30分～11時45分	⑦ 積菜の舞	12時35分～12時50分
③ 参列生徒の唱歌	11時45分～11時50分	⑧ 孔子の里獅子舞	12時50分～13時10分

※諸事情により予定を変更する場合がございますので、あらかじめご了承願います。

来訪・来信・雑録

- 4月8日 平成三十一年春季釈菜委員会開催
- 4月12日 釈菜総練習
- 4月18日 平成三十一年度多久聖廟春季釈菜
- 5月13日 令和元年度第一回理事会開催
- 5月17日 令和元年度第一回評議員会開催
- 6月1日 中国古典の扉①(公益財団法人孔子の里理事武田耕一)
- 6月6日 有田町同朋保育園、聖廟境内で論語の素読
- 6月11日 九州菓子メーカーの一行、多久聖廟を見学
- 6月15日 「鶴山塾」戦国の覇者・竜造寺隆信と多久(西南大学非常勤講師川副義敦)
- 7月6日 中国古典の扉②(武田耕一)
- 7月7日 後多久家14代多久皓一郎氏ご遺族様一行、聖廟を訪問
- 7月20日 「鶴山塾」青年時代の石井鶴山(熊本大学准教授 中尾健一郎)
- 7月27日 「鶴山塾」石井鶴山と名君鍋島治茂(佐賀大学准教授 中尾友香梨)
- 8月3日 中国古典の扉③(武田耕一)
- 8月24日 「鶴山塾」近世(江戸時代)に多久を訪れた人たち(公益財団法人鍋島報効会役員 大園隆二郎)
- 8月31日 「水江事略をよむ⑥」(公益財団法人孔子の里常務理事 服部政昭)
- 9月14日 東原庵舎に於て、県民カレッジジュニア博士証授与式。孔子の里ジュニアガイドの藤田瑠那さんに夢パレット学士。鳥井なおさんと加茂実愛さんに夢パレットジュニア博士の認定証が授与された。
- 9月28日 「鶴山塾」「牟田辺遺跡群に見る古代朝鮮半島往来」の概要(佐賀県芸術文化協会理事長高島忠平)
- 9月30日 令和元年秋季釈菜委員会開催

● 聖廟の森に棲む動物たち

● ホンドキツネ

キツネは十二月ごろから恋の季節に入ります。出産は早くて二月ごろです。聖廟の周辺には確実にキツネは生息していますが、私はまだ出会いがありません。行動が主に夜間というのが出合いの大きな障害です。(日本野鳥の会 福田 司)

梅雨明け間もない頃に、福田さんよりお便りをいただきました

した。ホンドキツネの写真と小文が同封されてきました。私とホンドキツネとの出会いは、平成二十八年(二〇一六年)の初夏の事でした。東原庵舎の玄関前にある樹木の手入れをしている時に、後ろで何か気配がするので振り向いたら二匹の小動物がじゃれ合っていました。私と目が合うと一目散に前の小川を渡り椎原山(廟山)へ、茂みの手前で一度立ち止まり此方を振り返ってからの山の中に立ち去りました。その頃、数人から、孔子の丘、八幡神社の周辺での目撃情報を得られました。その後は所在不明で



▲ホンドキツネ

す。私が出会ったホンドキツネは美しい黄褐色で子キツネのようでした。今でもキツネに化かされたような思いです。(服)

◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

● 会員の種類

個人賛助会員	年会費	一口	3,000円
法人賛助会員	年会費	一口	10,000円

● 入会申込み・お問い合わせ

〒846-0031 多久市多久町1843番地3 東原庵舎内
 公益財団法人孔子の里 事務局
 電話 0952-75-5112 FAX 0952-75-5320
 E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
 詳細は当財団ホームページ

 をご覧下さい。

編集後記

四囲を山に包まれた多久の雨水は、盆地の中央部を流れる多久川に集まり東南部に僅かに開けた挟間を通り、有明海に注がれます。川は肥沃な大地を潤し、豊かな恵みをもたらしてくれませんが、八月の未曾有の豪雨は、山間部の小川が溢れ、大量の流木と土砂で被害が出てしまいました。多くの皆様からご心配とお見舞いの連絡をいただき有難う御座いました。今は秋季釈菜の準備で大忙しです。(服)